Agile Japan 2026

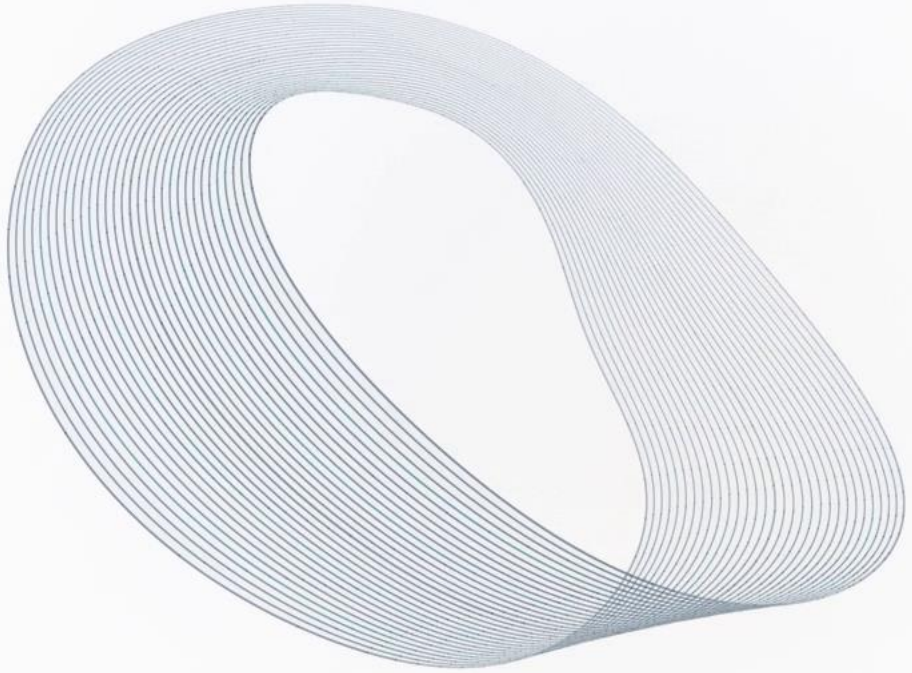
KEYNOTE　基調講演

Agile Paradox

加速する世界と、
アジャイルの原点

渡邊 大輔　Daisuke Watanabe

SB OAI Japan合同会社　エンジニアリング本部 本部長
ソフトバンク株式会社　法人事業統括 SB OAI本部 エンジニアリング統括部 統括部長
Certified Scrum Alliance Trainer™（CSAT™）
国立高専機構 半導体人材育成センター 特任フェロー／産学官連携統括



SB OAI Japan

今ここに参加している人は
チームのために
責任を果たすために
仲間、知見を探しにきたはず

You came to find people and ideas
to help your team and fulfill your responsibilities.

自分自身に嘘をつかずに
社会的責任を実現するには
どうしたらいいかを考えるために

To explore how to stay true to yourself
and fulfill your responsibility to society.

自分の人生のリーダーになるために
自分を鼓舞してHappyになるために、
実践し学んできた人たちですよね

You have practiced and learned
to lead your own life.

そういう人は、すでに
変革者なんです。

≒ リーダー

Ready NOW!

You are already a change maker.
Ready to lead. Ready now.

本日のアジェンダ

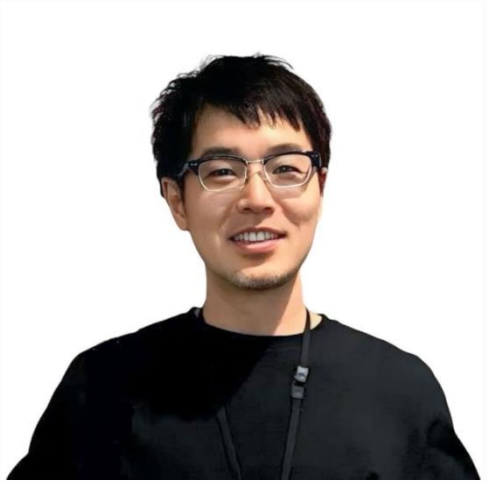
Agenda

1 イントロダクション	Introduction
2 私の原点	My origins
3 加速する世界	An accelerating world
4 アジャイルパラドックス	Agile Paradox
5 AI時代に、私たちはどう適応するか	How we adapt in the AI era
6 アジャイルの原点	The essence of Agile

1. イントロダクション



渡邊 大輔 / Daisuke Watanabe



SB OAI Japan合同会社 エンジニアリング本部 本部長
ソフトバンク株式会社 法人事業統括 SB OAI本部 エンジニアリング統括部 統括部長
ソフトバンク株式会社 グループASI戦略本部（兼務）
LINEヤフー株式会社 メディア・検索ドメイン サイエンスSBU（兼務）

VP, Head of Engineering, SB OAI Japan GK

神戸高専 電子工学科卒。半導体工学を基盤に、UNIX-Cプログラマーとして
通信・メディア・省庁など公共領域を中心とした大規模システムの
研究開発に従事。その後、ニュースメディア企業の執行役員、
ヤフー技術研究室長を経て、ソフトバンク株式会社に参画。

エンタープライズ領域におけるシステム開発、技術導入、
組織マネジメントに従事。ソフトバンクグループとOpenAIの協働のもと、
日本企業におけるAI社会実装を推進し、生成AIを活用した経営変革および
本番運用システムの実装に携わる。

Scrum Alliance Certified Scrum Alliance Trainer™（CSAT™）｜
Certified Team Coach™（CTC™）
Agile Coaches Alliance Japan Chapter Lead ｜ Accredited Team Coach（ATC）

国立高専機構 半導体人材育成センター 特任フェロー／産学官連携統括

実践を、次の世代へつなぐ

Connecting practice with the next generation

Agile Coaches Alliance Japan Chapter

世界中のアジャイルコーチと学び合い、
日本の実践を世界の仲間へ。



アジャイルコーチズアライアンス 日本リーダー

https://www.agilecoachesalliance.org/

国立高専機構 半導体人材育成センター

全国の高専と産業界をつなぎ、
技術を社会で生かす次世代の人材を育てる。



Semiconductor talent for real-world impact.

特任フェロー／産学官連携統括

https://www.sasebo.ac.jp/education/s-port/

私の成したいこと

My mission

国際社会で、解決する価値のある問題を解くこと

Solving problems worth solving, for the global community.

私はそれを実現させてどのような社会にしたいか

The society I want to help create

平和で（便利で）
誰もが生きやすい社会

A peaceful society where life is easier for everyone.

（貧困や国際紛争など国際社会の課題がある中で、
生きづらい人が少なくなると自分も幸せ）



私はそのためにどう行動するか

How I put that purpose into practice

Make global challenges visible and prioritize them. Help teams deliver safely and faster.

① 国際社会の課題を可視化し優先順に並べる

プロダクトオーナー　　優先度



国際社会

最優先課題

S　例：環境問題

A1　例：エネルギー

A2　例：貧困問題

B1

B2

企画・ソフトウェア開発
チームA

企画・ソフトウェア開発
チームB

企画・ソフトウェア開発
チームC

② チームが
安心安全に
デリバリーできる
速度を上げる

2. 私の原点



幼い日に見た、タンカーの進水式



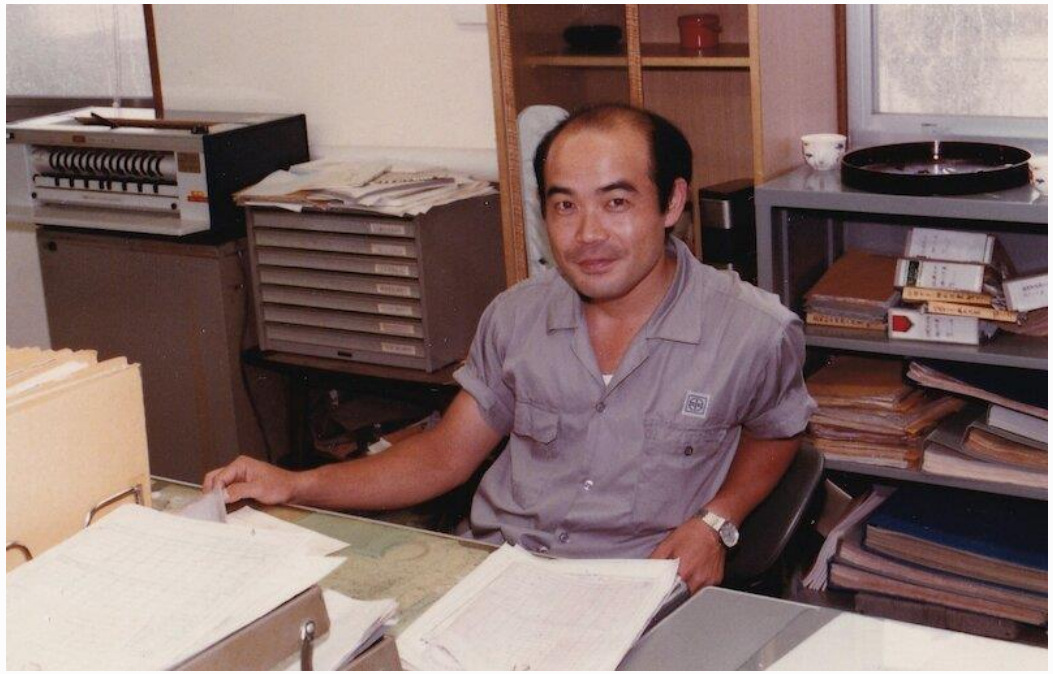
神戸造船所・2006年 / 663highland / CC BY 2.5



本人提供の家族写真 / 撮影年・撮影者不明

私は兵庫県で生まれた。
父は、神戸の川崎重工で働いていた。
幼いころ、タンカーの進水式を見ていた。

父は、仲間の名前を覚えていた



父・渡邊五郎 / 川崎重工で働いていた頃
Yahoo!ニュース掲載写真

https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/f0902e77ff60d22b10936a6e68ab49a7f13aabb8

工場には、約800人の社員。
父は、すべての人の名前を
覚えていたそうです。

毎朝、出勤してくる皆と挨拶を
していたそうです。

Kobe, 1995

阪神・淡路大震災、1995年



阪神・淡路大震災 / 神戸市・1995.01.17
写真：神戸市 / CC BY 2.1 JP

阪神・淡路大震災のとき

「危ないから、
帰ってくるな」

父自身は、毎日
ボランティアに通っていたそうです。

He told me not to return.
He himself volunteered every day.

コロナ禍のYahoo!トップページ緊急報道



BIT VALLEY 2020 公式録画 / 1:10:20
当時のサービスを紹介した本人の発表画面

映像の出典：BIT VALLEY 2020 公式録画
https://www.youtube.com/watch?v=jm7oIIEfSmE&t=4220s

コロナ緊急報道に取り組む私へ

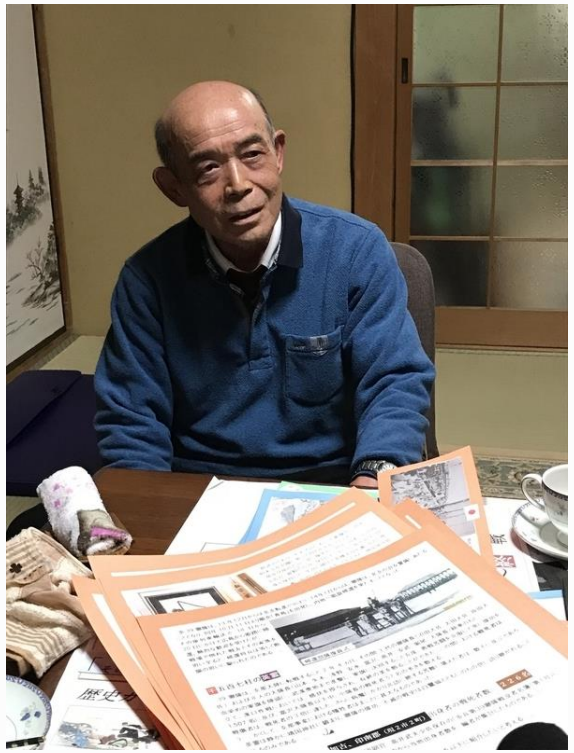
「しっかり仕事して
帰ってこんでもええ」

“Keep working. You don't have to come home.”

フルリモートのチームで、
信頼できる情報を集め、
届け続ける。

The last time we met in person

父との、最後の対面



写真・取材：宮本聖二氏、中村曇氏
Yahoo!ニュース
2020.04.02公開



本人提供・ビデオ通話の画面

コロナ直前、Yahoo!ニュースの
父の取材に、同行した。
それが、最後の対面になった。

コロナ禍、父は膵臓がんで
亡くなった。
私は、会いに行けなかった。

Pancreatic cancer took my father during the pandemic.
I could not visit.

https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/f0902e77ff60d22b10936a6e68ab49a7f13aabb8

父から、最後に学んだこと。

今が永遠には続かない。
この瞬間しかない。

The present does not last forever.
We have only this moment.

Putting technology to work for people

技術を、人の役に立てる



半導体研究の参考写真（NIST）
Photo: Curt Suplee / NIST

技術や経験を持って、
世界の誰かの役に立つ。

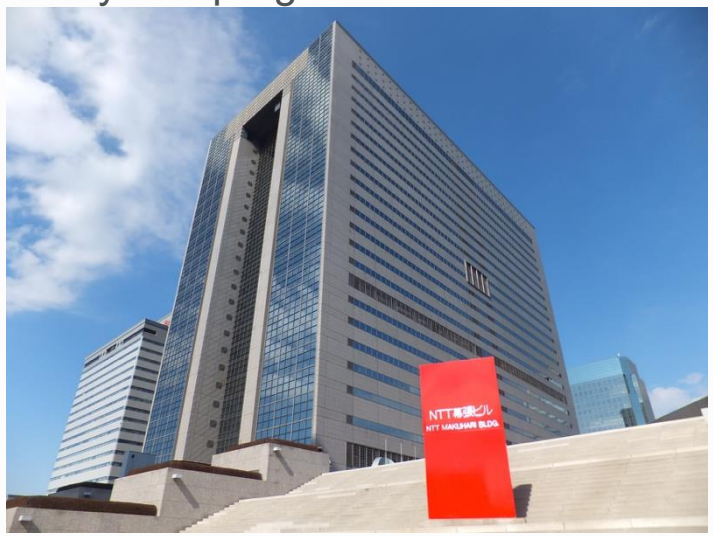
中学生のころ、英語の教科書で
知った青年海外協力隊。

神戸高専で学んだ電子工学。
NHK『電子立国 日本の自叙伝』。

番組は1991年放送・全6回

NTTから始まった開発の現場

“Are you a programmer?” “I can write C,” I replied.



NTT幕張ビル（2012）/ 掬茶 / CC BY-SA 3.0



ATM交換機の参考写真 / Barcex / CC BY-SA 3.0

「君はプログラマーか？」と問われた。

「C言語なら書けます」

作業服を着て、卒研のCを
復習しながら働いた。

10歳、20歳年上の先輩たちは、
技術書を贈り、応援してくれた。

B-ISDN・ATMセル交換機のクロック・周波数制御
UNIX/C、オブジェクト指向プログラミング
マクロジェネレーション

テレビ局の速報システム開発

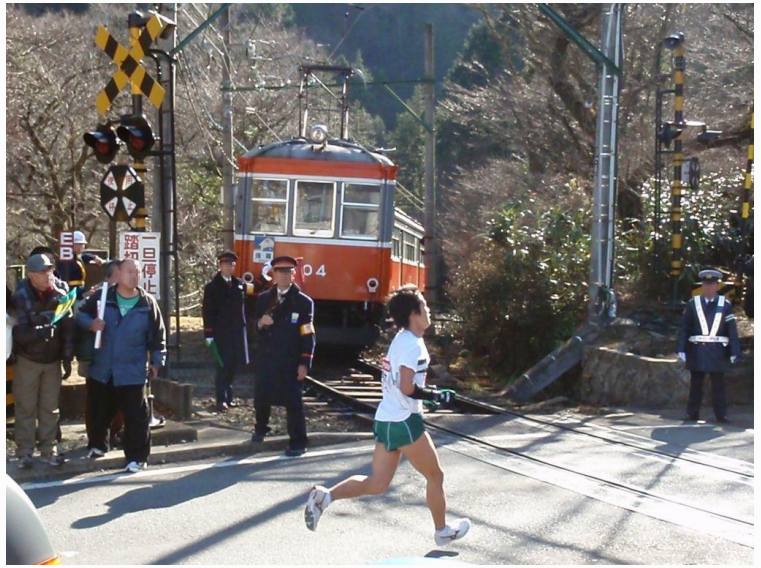
One design. 1.5 months. I implemented every layer myself.

衆議院・参議院選挙速報



参考写真：衆議院選挙の投票所（2024年・熊谷市）
Nori Norisa / CC BY 2.0（縮小）

箱根駅伝速報



箱根駅伝の参考写真（2010年）
Cassiopeia sweet / Public domain

渡されたのは、デザイン一枚。一か月半でゼロから開発。

インフラ、バックエンド、フロントエンド、運用自動化。
全ての実装を一人で担当。

The development environment I worked in

私がいた開発の現場

要件定義も仕様も設計書もない。
前任者もいない。

あるのは、異常に短い期限。
そして、失敗が許されない本番。

必要なことを、人に聞き、確かめた。
実装から運用まで、一人で担っていた。

実装は一人。でも、仕事は人に支えられていた。

I handled implementation and operations, supported by others.

The people who backed my work

仕事を支えてくれた人たち



The person in charge said he would take responsibility.

参考写真：2008年箱根駅伝・沿道の応援風景
Rick Seely / CC BY-SA 3.0

「これが失敗したら
俺はクビになるが、
なべちゃんのせいじゃない。
頑張ってほしい」

当時の責任者の言葉

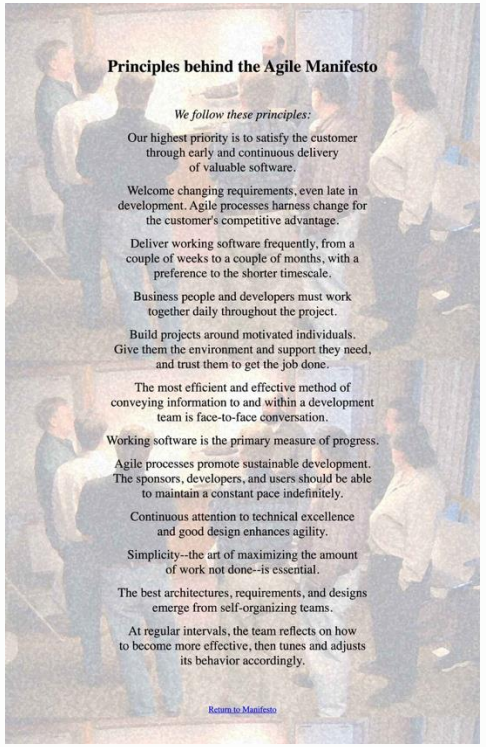
箱根のルールから学び、開発した。
本番当日は、役員の差し入れも。

いまも、仲間と一緒につくる。

美談ではなく、このような経験があるからこそ、一人に背負わせず、
届け続けられる条件を整えることを大切にしていきたい。

アジャイルソフトウェア開発宣言の背後にある原則

Principles behind the Agile Manifesto



第1原則・英文原文から引用

“Our highest priority is to satisfy the customer through early and continuous delivery of **valuable software**.”

公式サイト掲載の日本語訳を引用

「顧客満足を最優先し、
価値のあるソフトウェアを
早く継続的に提供します。」

英語版公式ページ：12原則の全文

Source: Kent Beck et al. (2001), Principles behind the Agile Manifesto, Principle 1 / 強調は講演者

原文・画面：https://agilemanifesto.org/principles.html

日本語訳：https://agilemanifesto.org/iso/ja/principles.html

価値のあるソフトウェアとは

私たちは「価値を届けよう」と言い続けてきました。

価値のあるソフトウェアとは何か。

We talk about delivering value.
What makes software valuable?

私がつくり、届けたいのは、

社会に必要とされるソフトウェア。

人々の暮らしや仕事に、
より良い変化を生むソフトウェア。

誰に、どんな良い変化をもたらすのか。
使う人と、その結果を確かめる。

I want to build and deliver software that meets society’s needs
and makes a positive difference in people’s lives and work.
Check the results with the people who use it.

What software does society need?

社会に必要とされるソフトウェアとは何か。

私たちは、何をつくればいいのか。

What should we build?

日本の未来を考える、3つの課題

次の世代へ、どんな社会を渡すか。

What kind of society will we leave to the next generation?

Yahoo!ビッグデータを用いた自身の課題整理（2025年）／公式ランキングではありません

少子化

Declining birthrate

「3倍のパフォーマンス」
を、どう生み出すか。

次の世代の負担を減らす。

災害

Disaster resilience

この国で、
安心して暮らし続ける。

災害に強い国へ。

戦争

War and peace

戦争の記憶を伝える。

平和を、次の世代へ。

「3倍」の問題提起：谷口功・国立高専機構理事長インタビュー（2025年）

関連：安宅和人「海面上昇時代と三大都市圏」ほか（2025年）
https://kaz-ataka.hatenablog.com/entry/2025/09/06/180455

3. 加速する世界

AIとともに、つくる



加速する世界、顧客の最前線で、つくり、届ける



SB OAI Japan / FDE

顧客の現場で、
課題を理解する。

自身も実装し、
本番運用まで、
責任を持って関わる。

昨日のベストプラクティスが、今日は更新される世界。

過去の成功体験への固執を手放し、顧客とともに実践し、結果から学び続けなければ、改善は続けられない。

Five FDE requirements

FDEに求められる5つの要件

SB OAI JapanのFDEは、顧客に向き合いながら、自ら手を動かして前に進められる実装型の役割。

01 課題とスコープ Scope	顧客課題を理解し、 不確実な状況でも技術スコープを定義できる
02 顧客との協働 Customer collaboration	顧客と直接対話しながら、 プロトタイプから本番導入まで進められる
03 技術判断 Technical judgment	システム設計・実装・本番化について判断できる
04 自ら実装 Implementation	必要に応じて、自分でも手を動かして実装できる
05 顧客とプロダクト Customer and product	技術だけでなく、顧客要件と プロダクト要件の間をつなげられる

SB OAI Japanにおける定義 / 2026年9月時点

人が指示し、Codexが実行する

Codexを活用した開発の流れを可視化した、20秒のイメージ映像。
Illustrative workflow. Not a controlled comparison.



SB OAI Japan提供の開発記録 / 映像はイメージ。比較実験ではありません。

活動期間：6週間
課題解決：150件
人の操作時間（提供記録）
1人・1時間 × 8回

目的と制約を定め、結果を確かめる。

6 weeks / 150 issues
Recorded human interaction time
1 person / 1 hour × 8 sessions

アジャイルプラクティスを、人とAIで共有する

Doneの定義 共通の品質基準	AGENTS.md / 品質文書への参照 製品に共通する品質と、組織の基準を共有する。
Acceptance Criteria 作業ごとの受け入れ条件	Product Backlog Item / Issue 各項目で、利用者が何をできるかを示す。
実装計画・検証手順 学びに応じて更新する計画	PLANS.md（任意の運用例） 該当IssueとDoDを参照し、計画・検証を記録する。
実行設定・追加指示 モデル・接続・実行範囲など	.codex/config.toml developer_instructions に作業指示も書ける。

合意を共有し、テストとレビューで確かめる。

OpenAI Docs / Codex configuration

OpenAI Cookbook / Development workflows

Doneの定義と Acceptance Criteria

共通の品質と、作業ごとの期待を明文化し、人とAIで共有する。

DoD sets shared quality standards. Acceptance Criteria define expectations for each item.

Definition of Done

AGENTS.md / 共通の品質基準

- 必要な自動テスト・CIが通っている
- 合意した品質・セキュリティ基準を満たしている
- コード・品質レビューが完了し、必要な指摘が解消されている
- 変更に必要な運用手順・監視・復旧方法が整っている

Acceptance Criteria

Issueの記載例：インターナル検索AI

- 権限外の情報を取得・表示しない
- 情報の鮮度と公式性を、管理者が確認できる
- アクセス範囲の承認を受けて利用できる

記載例。PLANS.mdから、該当IssueとDoDを参照する。

Scrum Guide (2020) / Definition of Done

Scrum Alliance / Acceptance Criteria

RAGから、Context Layer全体の設計へ

インターナル検索AIで、変わるマネジメントの役割

必要な判断を明確にすることと、不要な待ちをつくることを、区別する。

Clarify necessary decisions. Avoid unnecessary waiting.

検索の要件	確かめること
Relevance（関連性）	探している内容に合う情報が得られるか。
Freshness（鮮度）	必要な新しさの情報が得られるか。
閲覧権限	その利用者に、閲覧が許可された情報か。

マネジメントが、Relevance・Freshness・閲覧権限を承認・決定する。

Management defines and approves requirements for relevance, freshness, and access.

AIが使う情報と、その情報を使える条件を整える。

The world keeps accelerating

世界は、さらに加速していく



2026年6月16日　Patching as a Service 発表

サイバー攻撃から
重要インフラを
守る世界へ。

Protecting critical infrastructure
from cyberattacks.

この先も、世界は私たちの想定を超えていく。

参考：ソフトバンク共同発表　https://www.softbank.jp/corp/news/press/sbkk/2026/20260616_02/

4. アジャイルパラドックス

変化に適応するための仕組みが、変化を妨げるとき



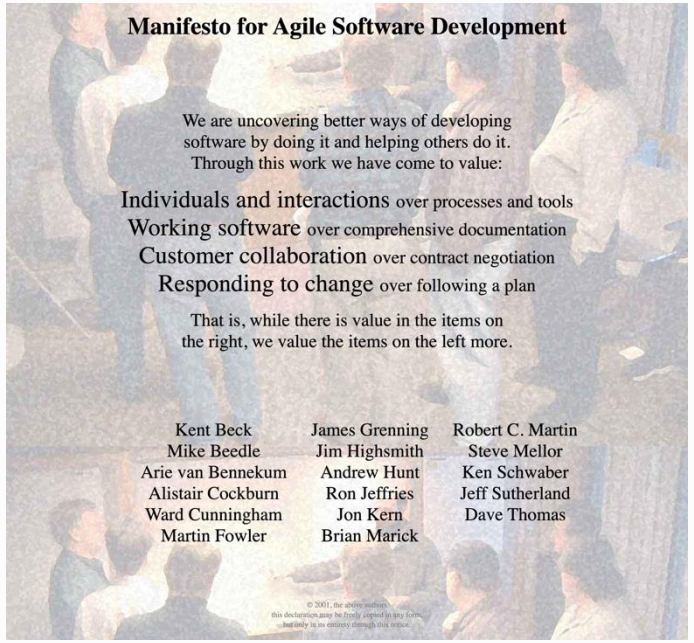
適応するための仕組みが、適応を妨げる

変化に適応するために導入した仕組みが、
いつの間にか、
変化を妨げる仕組みになっている。

現場に求めること	仕組みが求めること
顧客から学び、計画を変える	当初計画の達成だけで評価する
現場で判断する	変更のたびに上位者の承認を待つ
継続的に価値を届ける	完成しても、レビューの日まで公開を待つ

アジャイルソフトウェア開発宣言の出発点

原文では、実践することと、他者の実践を手助けすることを、andで結んでいる。



英語版：宣言全文・著者・著作権表示・複製条件を含む

https://agilemanifesto.org/

宣言の冒頭・英文原文から引用

“We are uncovering better ways of developing software by doing it **and** helping others do it. Through this work we have come to value:”

公式サイト掲載の日本語訳を引用

「私たちは、ソフトウェア開発の実践
あるいは実践を手助けをする活動を通じて、
よりよい開発方法を見つけだそうとしている。
この活動を通して、私たちは以下の価値に至った。」

大切にしたいこと

実践するときも、他者の実践を支援するときも、
そこで得た学びを改善につなげ、
よりよい開発方法を見出し続けること。

Manifesto for Agile Software Development, 2001 / 英語原文・公式日本語訳を引用（強調は講演者）

「Agile Paradox」とは何か

顧客に価値を届けるためのアジャイルが、
実践から学び、よりよい開発方法を見つけることより、
既存の方法を守ることを優先している状態を指す。

既存の方法を続けること自体に問題があるわけではない。
しかしその維持が、必要な学習や適応を妨げる場合、パラドックスが生じる。

The paradox arises when Agile, intended to deliver value to customers,
prioritizes preserving existing methods over learning from practice and finding better development methods.

私自身も、このパラドックスの中で働き、自らの実践を問い直し続けています。

実践、結果責任、プロフェッショナリズムを問い直す

1　互いの専門性と、成功への願いを尊重する

Respect each other’s expertise and shared desire for success

実装、対話の促進、判断の支援、組織の障害除去。
それぞれの事情を理解し、今ある強みを持ち寄る。

参考・意訳：　Shore & Warden, The Art of Agile Development (2007), XP “Respect”

2　役割に応じて、結果に責任を持つ

Take responsibility within our roles

使われた結果を確かめ、
その学びを次の判断に生かす責任を持つ。

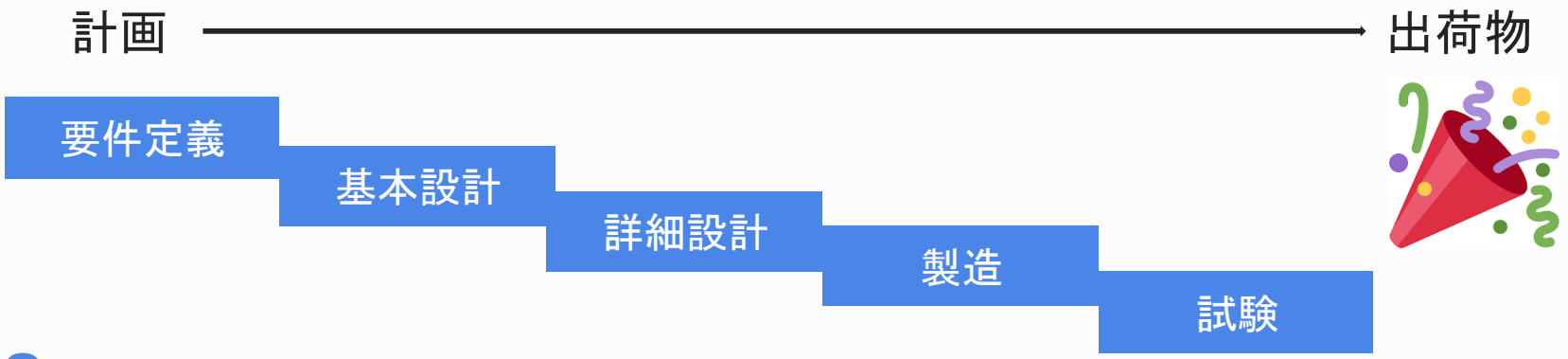
3　経営が、責任を果たせる条件を整える

Leaders create the conditions to deliver

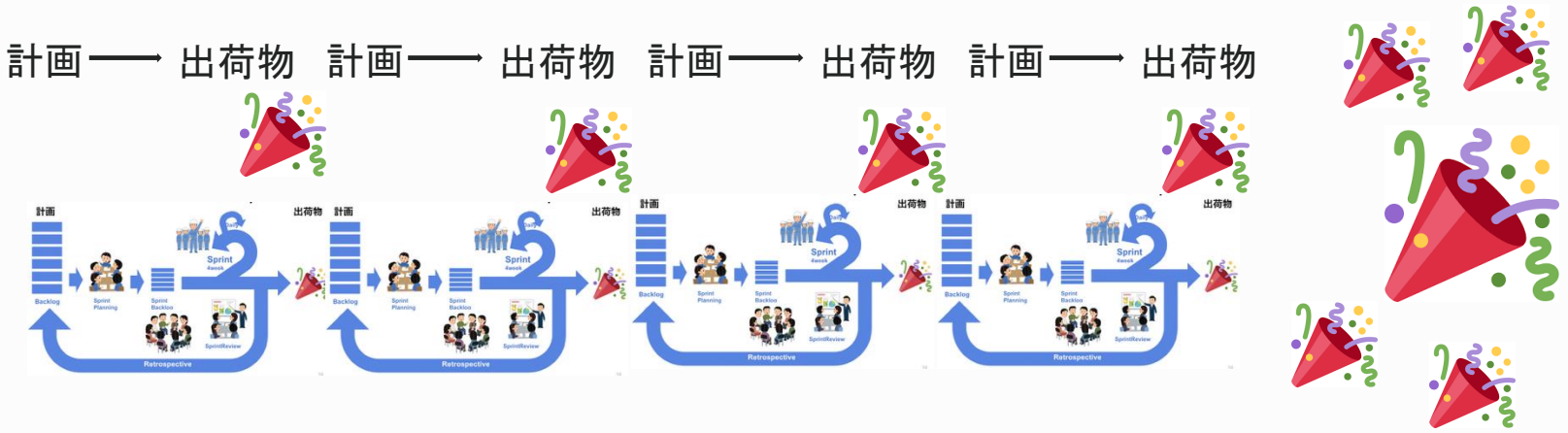
結果に責任を持てるよう、必要な権限を委ね、
専門性を生かせる体制を整える。

Agile Software Development

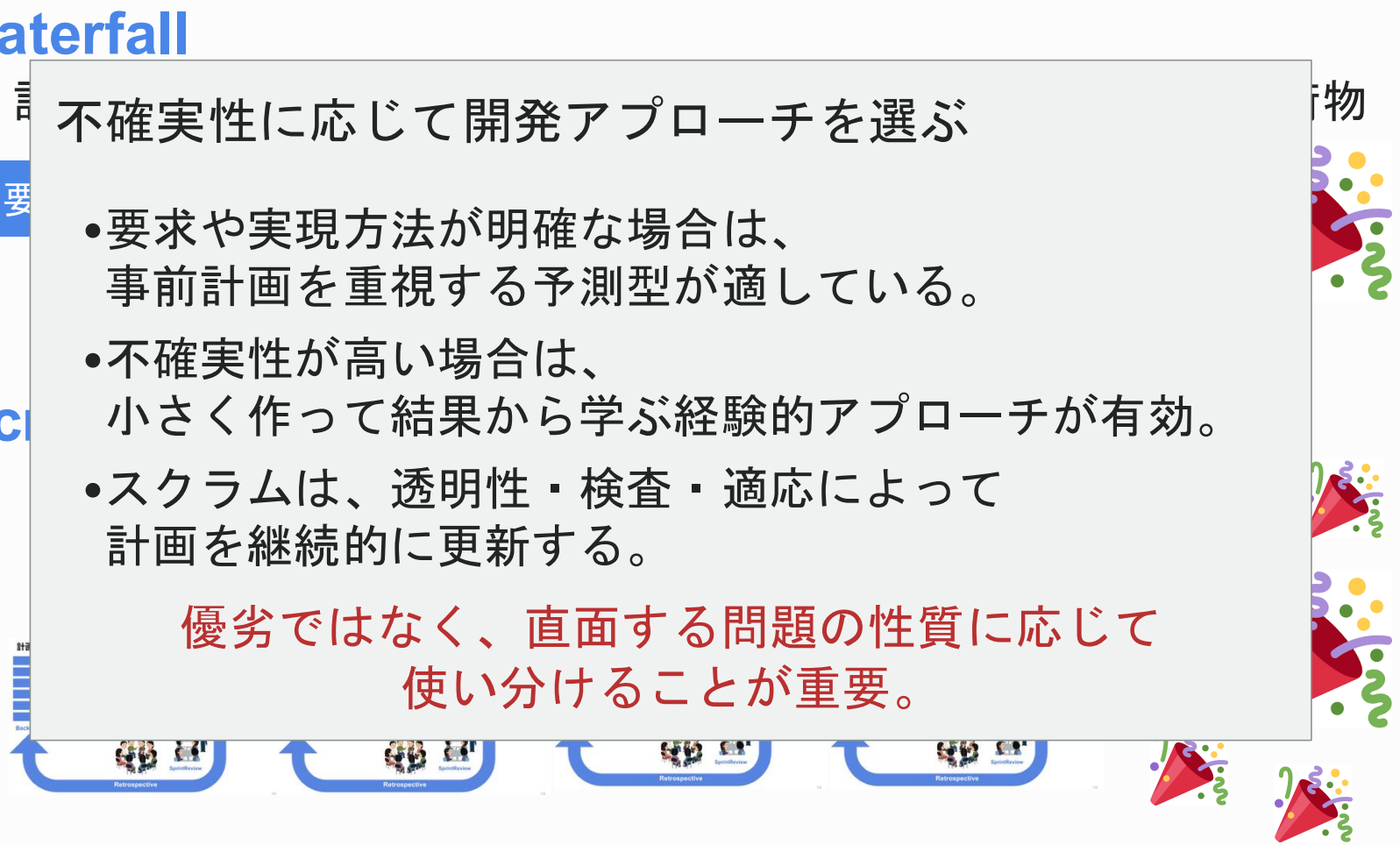
Waterfall



Scrum



Agile Software Development



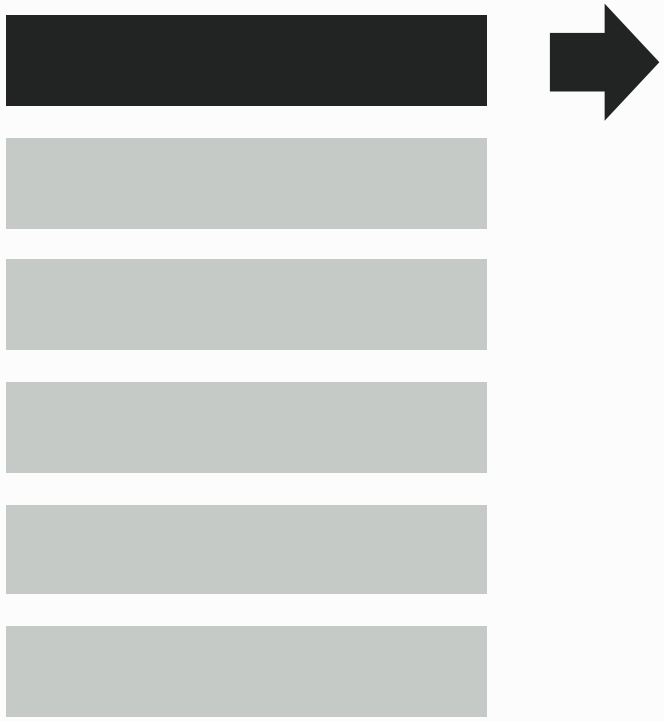
不確実性に応じて開発アプローチを選ぶ

- 要求や実現方法が明確な場合は、
  事前計画を重視する予測型が適している。
- 不確実性が高い場合は、
  小さく作って結果から学ぶ経験的アプローチが有効。
- スクラムは、透明性・検査・適応によって
  計画を継続的に更新する。

優劣ではなく、直面する問題の性質に応じて
使い分けることが重要。

アジャイルな状態になるための最もシンプルな方法

Product Backlog



未完了の仕事を見るための簡略モデル

Product Backlog Itemを
二つの状態で見る

1. 対応待ち

Waiting

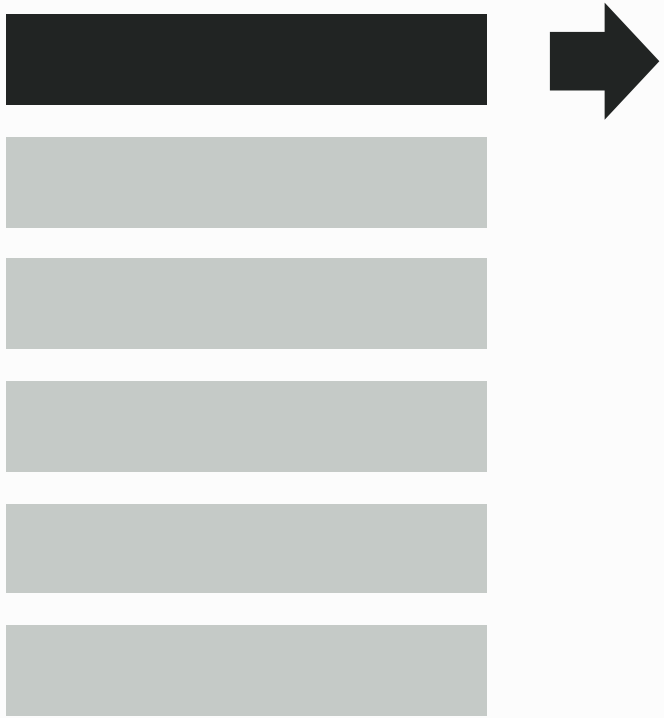
2. 対応中

In progress

このため、この二つの状態への
アプローチが有効

アジャイルな状態になるための最もシンプルな方法

Product Backlog



未完了の仕事を見るための簡略モデル

Product Backlog Itemを
二つの状態で見る

1. 対応待ち　→ 待ち時間を削減
Waiting　Reduce waiting time

2. 対応中　→ 製造方法を改善
In progress　Improve how work is done

個人的には、1.のアプローチをとることを
おすすめします。

私の経験では、リードタイムを
30〜40%短縮することができました。

Is Agile dead?

アジャイルは死んだのか？

アジャイルは、死んでいない。

社会が必要とする価値を届けるために、
学びに応じて、つくり方も組織も変え続ける。

アジャイルは、加速する世界でこそ重要になる。

Agile has not died. Keep adapting how we build and organize to deliver the value society needs.
Agile matters even more in an accelerating world.
However, it loses its purpose when it forgets its responsibility to deliver value.

ただし、社会が必要とする価値を届ける責任を忘れたとき、
アジャイルは、その存在意義を失う。

5. AI時代に、私たちはどう適応するか

実装の高速化を顧客価値につなげる5つの論点



5-1　実装の高速化によって、意思決定や顧客検証の遅さが顕在化

つくる速度は上がった。
では、顧客に価値が届く速度は上がったか。

Discover	Decide	Build	Verify	Release	Learn
課題発見	判断・承認	実装	品質確認	提供	効果確認

承認や顧客検証を含む、
仕事全体で、制約を探す。

参考：Thoughtworks (2026)　https://www.thoughtworks.com/insights/blog/agile-engineering-practices/ai-makes-agile-more-alive

5-2　評価制度を含む、組織の運営方法全体の整合が必要

現場だけに適応を求めても、組織全体は適応できない。

Goals	部門を越えて、顧客にとっての成果を目標にする。
Authority	影響に応じて、現場で判断できる範囲を決める。
Budget	長期の資金管理と、実施内容の見直しを両立する。
People	課題に応じて、必要な専門人材を配置する。
Data	品質と閲覧権限を保ち、結果を確かめられる。
Evaluation	顧客の成果・品質・学び・協働を評価する。

評価制度は、この整合をつくる一部。

現場

信頼できる変更を届け、
使われた結果から学ぶ。

経営

その学びを判断に
反映できるよう、
権限・予算・評価を整える。

参考：McKinsey (2026) https://www.mckinsey.com/industries/technology-media-and-telecommunications/our-insights/beyond-the-copilot-scaling-the-agentic-product-development-life-cycle

参考：Deloitte (2026) https://www.deloitte.com/content/dam/assets-zone3/us/en/docs/services/consulting/2026/state-of-ai-2026.pdf

5-3　継続的な適応と、スプリントによる運営は両立する

では、スクラムをやめれば解決するのか。

Plan	スプリントゴールに向けて、 日々、計画を調整する。
Increment	一つのスプリントで、 複数のインクリメントをつくれる。
Release	完成した成果は、 スプリント終了前にも提供できる。

スプリントの長さと、
提供・検証の頻度を分けて考える。

Scrum Guide / November 2020 / 要約

5-4　AI時代には、技術的卓越性がより重要に

何をつくり、どこまでAIに任せるか。
どの条件を満たせば、提供できるか。

**生成された変更を理解し、
検証し、運用できること。**

評価を継続し、権限と失敗時の動作、停止・復旧まで確かめる。

OpenAI Docs / Evals

参考：DORA (2025) https://cloud.google.com/blog/products/ai-machine-learning/announcing-the-2025-dora-report

参考：McKinsey (2025) https://www.mckinsey.com/industries/technology-media-and-telecommunications/our-insights/unlocking-the-value-of-ai-in-software-development

5-5　経営・開発組織への提言

判断の速さと質、判断を修正できる仕組みを一緒に設計する。

Small, reversible changes	現場が判断しやすい権限と条件を決める。
Changes with major consequences	影響に見合う確認と統制を設ける。

使われた結果が、次に何をつくるかを決める。

Customer impact	顧客の仕事は、どう変わったか。
Time to delivery	課題発見から提供まで、どれだけかかったか。
Quality	障害や手戻りは、どう変わったか。
Cost to operate	運用・保守を含む費用は、どう変わったか。

6. アジャイルの原点



加速する世界で、私が大切にしている3つのこと

1　実践、結果
実際に使われているか、使う人に何をもたらしたかを確かめ、
学びを次の判断に生かす責任を持つ。

2　価値を届けるために使う
技術もアジャイルも、人と社会に必要とされる価値を届けるために使う。

3　経営、顧客、チームとともに働く
私が実践で大切にしているコーチングの姿勢。

ともにつくり、運用し、使う人に何をもたらしたのかを確かめ、
結果責任を引き受ける立場に立つ。

Take responsibility for checking actual use and impact, and using what we learn in the next decision.
Use technology and Agile to deliver the value people and society need.
In my coaching practice, I work with leaders, customers and teams, accountable for outcomes.

[結論]

Agile values and principles matter more in this accelerating world

この加速する世界では、アジャイルの価値と原則がより重要に

AIでつくる速度が上がるほど、
使う人から学び、より良い開発方法を見つけだし、
組織をより良く変えていく重要性が高まる。

そして、社会に必要とされる価値を
届け続ける責任が、より問われる。

As AI accelerates development, it becomes more important to learn from users,
find better ways to develop software and improve our organizations.

So does our responsibility to keep delivering the value society needs.

The engineers who taught me technical skills and accountability for implementation

技術と、実装責任を教えてくれた先輩たち

My mentors had retired. Some had died. That frightened me.

コロナを経て、当時の先輩たちに連絡した。
私に数々の大切なことを
教えてくれた先輩たちは、
皆、現場を引退していた。

亡くなった方もいた。
恐ろしくなった。

I must pass this on to future engineers.

未来の技術者へ、伝えていかなければ。

私自身も、仲間とともに実践し、使う人から学び続ける。
先人たちが私にしてくれたように、その学びを次の世代へつなげていく。

I will keep working with my colleagues and learning from the people who use our software.
I will pass on what I learn to the next generation, just as others have done for me.



本人提供 / AIエージェント技術開発研修・2026年8月

This work. This team. This moment.

今の仕事、今の仲間、この瞬間

今の仕事、
今のチームで働けるのは、今しかない。

この瞬間しかない。

Only now can we do this work, with this team.
We have only this moment.

アジャイルの原点

必要とされるものを、必要とされるときに、
責任を持って、必要としている人に届けよう。

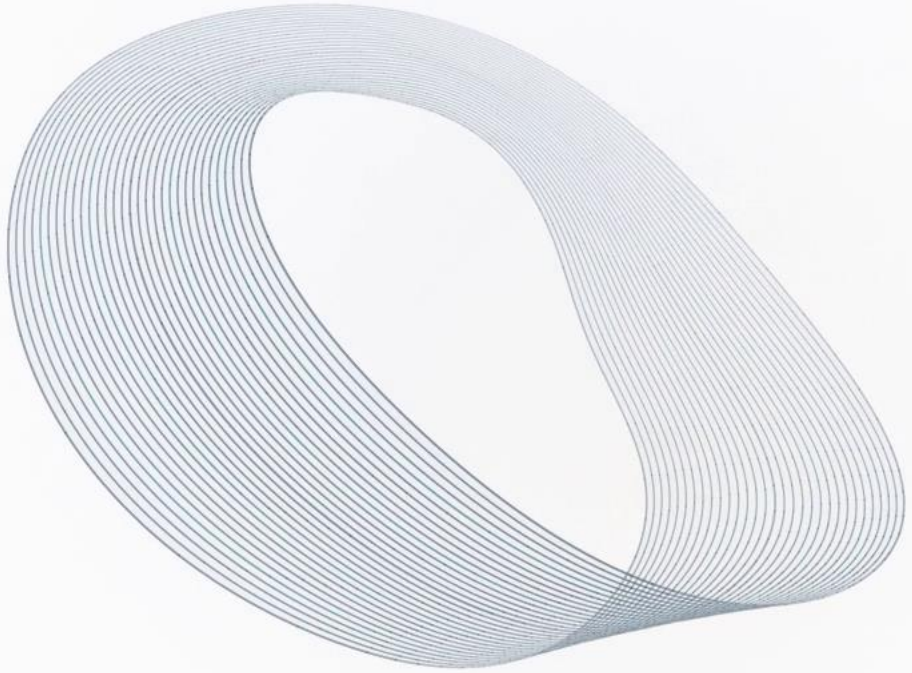
それが今なら、今すぐに。

それが、アジャイルの原点。

Deliver what people need, when they need it.
Take responsibility for getting it to them. If they need it now, deliver it now.

Thank you

ありがとうございました



渡邊 大輔　Daisuke Watanabe

SB OAI Japan合同会社　エンジニアリング本部 本部長
ソフトバンク株式会社　法人事業統括 SB OAI本部 エンジニアリング統括部 統括部長
Certified Scrum Alliance Trainer™（CSAT™）
国立高専機構 半導体人材育成センター 特任フェロー／産学官連携統括

SB OAI Japan